



俺、バンコク  
で生きるわ



ishipirosan

# 第一章：奥村洋一という男

奥村洋一（28）が人の出会いによって変わっていった話だ。

家族は父がコンビニのオーナー、母は主婦、弟は優秀な高校生である。

両親は仕事で毎日が多忙で、家で料理をすることもなく、いつもコンビニの廃棄を食べさせていた。

弟は優秀であり、長男と次男はいつも比較されて生きてきた。

奥村洋一は長男であり、学力コンプレックスをもち、根暗である。

彼は眼鏡をかけ、丸顔が特徴だ。

そこそこの大学に入りはしたが、興味があつて勉強したわけでもなく

ただなんとなく学校へ入って、勉強も少しかじるぐらいやって

だらだらと過ごしていた。

専門は環境科学と言っているが、

中学生・高校生の知識で止まっており、大学の講義はほとんど理解できていない。

プライドは高く、頑固な性格、趣味はオンラインゲーム

いわゆる、オタクという部類である。

そんな彼は学校でクラブやサークルも入ることなく、ただ自宅から電車で1時間通い

、家でオンラインゲームをし、寝る。ただこれの繰り返しだ。

実家のコンビニも手伝うこともなく、食するのはコンビニの廃棄品だけ。

もちろん、飲み会やコンパにも参加したことがなく、ビールやお酒の味もほとんど知らない。

そもそも友達と絡んだりするのが好きではなく、誘われることもないのだ。

友達がいらないわけではないが、少人数で必要最低限の会話を少しするぐらいで、

あとはSNSでコメントをするぐらいだ。友達もオンラインで作れば、いいと思っている。

一日、会話しなかった日もあることもざらにある。そんな学生生活を過ごし、いつのまにか

4年の歳月が過ぎていた。

そんな男も大学4年になると、友達が続々と会社の内定を取り始めていたのを見て

ビクビクし始めていた。「ねえ、どこの会社入るの？」と友達によく聞いていた。

彼は極度の緊張症であり、会社の面談をすると、ほとんど話せなくなってしまうのだ。

質問をされていても「ですから、ええと、あつと、ですね」という感じだ。

会社のエントリーシートに100社登録したものの、ほとんど内定が取れず

結果的に、彼はどこにも合格できないでいたのだ。

赤点を出しながらも、なんとかぎりぎりラインで卒業できたため、

大卒という証明書だけはなんとかもらうことができたのだが、内心は将来が不安だった。

卒業後、彼はなにをやるかと悩みこんだ結果、

結論はとりあえず派遣アルバイトに登録することだった。人と話すことが苦手な彼は倉庫内作業とい

う

仕事を携帯電話で見つけた。人生で初めてする仕事だ。

派遣会社で登録を済ませると、まずバスで連れていかれたのは、都内の倉庫だった。

バスの中は覇気の無いおじさん、若者が5人～6人ぐらい黙って乗っているのだ。

彼はそれを見て、

心の中で「なんてやる気のない人なんだ、この人たちも人生を棒に振って生きているんだろう」

と思った。

会社の倉庫に到着すると、さっそく作業服を着せられ、社員に仕事を指導される。

仕事内容は、**ピッキングという仕事**だ。

倉庫のコンテナに部品が置かれていた。社員にもらったピッキング用紙の部品をただダンボールに入れるという作業で、誰にでもできる内容だった。

パートの中には、腰が曲がった60歳と見られるおばあちゃんもいるぐらいなので

作業内容もきつくないと思われた。

しかし、最後に任された搬入・運搬だけはとてもきつかった。

30kg以上の荷物を1時間以上かけて、トラックに積み込むという内容だ。

学生時代は、帰宅部であったため、ほとんど力仕事をしたことがない。

彼にとっては過酷な仕事だった。仕事が終わってからは、体が疲弊しており

、腰痛にもなっていたのだ。

そんな仕事の日々が続いたある日の帰宅途中のことだ。

いつものように、30kgを超える荷物を運び続けていたため、体がぐたくたになっていた。

彼はある**看板**が目にとまった。それも**タイマッサージ店の看板**である。

日本人の店に入ると、気まずいと思い、あえてそちらに入店した。

マッサージ店に行ったことがない彼がはじめて経験することになる。

受付に応じてくれたのは、**髪が長く、つやがあり、胸の谷間がある**

**笑顔が素敵な若い女性**だった。「いらっしゃいませ、お一人様ですか」

拙い言葉を話すも彼にとっては、癒される天使のような言葉に聞こえた。

彼女の源氏名ではカヨと呼ばれていて、あとで聞くとタイの地方出身者らしい。

彼は、入店すると、奥の個室に入ることになった。ボンヤリとした灯りが照らす

部屋にはマッサージ専用のマットレスみたいなのが敷かれてあった。

「お客様、うつ伏せになってください」と言われ、マッサージがスタートした。

疲弊している体に、マッサージをしてくれる彼女の手は優しく、癒しをくれる。

そして、どうしようもない私に笑顔で優しく言葉を投げかけてくれる。

私は、学生の時から恋人がいたことがなく、女性と面と話したのも

ひさしぶりだった。はじめは、緊張したが、次第に彼は彼女に悩み、仕事、趣味など、色々なことを本音で話すようになった。

理由は彼女は相槌を打って、ちゃんと聞いてくれたからだ。

そして、笑顔で「悩まなくていいよ、私に何でも話して」と言ってくれた。

彼の心はだんだん彼女に惹かれていくようになってきた。

マッサージが終わると、彼は心も体もリフレッシュできており、気分も健やかになっていた。

値段は30分で7000円だったが、給料の少ない彼にとっては痛手な金額ではあったが、

たいした金額ではないと思っていた。

それからというものの、彼は仕事に一生懸命になるようになっていった。

彼女に会いたい、彼女と話したい、だからお金を稼ぐという一心で派遣バイトを頑張り始めた。

残業も自分から積極的にやるようになっていった。

それからというものの、彼は月に2回～3回もタイマッサージでカヨさんに会いに通うことになっ

ていった。

彼は恋心を持つようになっていっていき、会いたい、話したい、デートしたい

と思いが膨らむ一方だった。Lineで連絡先も交換することができ、

夜にたまにオンラインで会話することができ、毎日、充実した日々を過ごしていた。

本屋でタイ語の本を購入し、この言葉は何？とかたわいもない話をしていた時が

幸せだった。

そんな彼女から一通連絡があった。「ごめん、タイへ帰る。さようなら」

慌てた彼は、すぐに返信するも、連絡が取れない。

彼女に何があったのか、心配でたまらないため、彼は真っ先に行動したことは

好きな彼女の国へ行くことと。そして、タイへ出国する。・・・第2章へ